

ブラジルの宗教と移民③

おやさと研究所講師
中西 光一 Mitsukazu Nakanishi

ブラジル移住に向けて

南北戦争の終結とともに、アメリカ南部連合は崩壊し、南部の人々は混乱と困難に直面していた。特に、黒人奴隷制の廃止と黒人の基本的権利を保障した「再建期修正条項（Reconstruction Amendments）」の成立は、白人至上主義社会の終焉を意味し、南部の白人たちの怒りを買った。そのため、彼らの一部は外国に新天地を求めた。その行き先はカナダ、イギリス、ジャマイカ、キューバ、メキシコ、ブラジル、日本、エジプト、ベネズエラ、ペリイズ、フィジー、太平洋諸島など多岐にわたったが、とりわけ人気があったのはブラジルとキューバであった。なぜなら、両国では奴隷制の上に社会・経済活動が成立しており、白人種を国家の頂点に位置づけた人種的なヒエラルキーが確立されていたからである。

実のところ、当時のブラジルは、南北戦争において国際法上中立の立場を保ちながらも、フロリダ号、ジョージア号、アラバマ号といった南部連合海軍の戦艦が同国のバイーア州やペルナンブコ州に停泊することを許可していた。その理由は、ブラジルが南北戦争を注視し、そこに自国の奴隷制の運命を重ねていたからである。ブラジルにとって、北軍の勝利は自国の奴隷制に対する危機を意味し、逆に南軍の勝利はその存続を意味していた。それゆえ、ブラジルは南軍の勝利を後押しする目的で、戦艦の受け入れを秘密裏に行っていたのである。さらに、戦後のブラジルは南部白人を積極的に受け入れ、移住を円滑に進めるため、次の支援を行った。まず、渡航費を支援し、植民地開拓に必要な農耕用具などの輸入税を免除した。次に、リオデジャネイロ港に到着後、移民が約20日間、移民宿泊施設に滞在することを許可し、最後に、リオデジャネイロから植民地への移動費も支援した。

南部移民協会の創設

ブラジル政府の支援に加えて、1865年の後半に創設された南部移民協会（Southern Immigration Society）も移民活動において重要な役割を果たした。同協会は、南部諸州に事務所を設置し、ブラジルの地理的環境、気候、土壌、生態系などの自然的条件や、ブラジルの社会文化的性格を調査するために調査員を派遣した。調査員たちは、移住が円滑に進むよう、調査結果をガイドブックや新聞、書籍などに記し、それらは移住を促進する材料となった。なお、1865年から1866年にかけて、8人の調査員がブラジルに派遣され、彼らの活動が功を奏した結果、南部では「ブラジル・フィーバー（Brazil Fever）」が起り、2,000人から4,000人の南部人がブラジルに移住したといわれている。

折しも、南部移民協会の活動に呼応して、ブラジル政府は1865年8月にニューヨーク市内で調査員の報告を統括するための事務所を設立した。この事務所はブラジル人ジャーナリストのクインティーノ・ボカイウ・ヴァの管理下に置かれ、彼は移住促進のために『ザ・ブラジル・エミグレーション・リポーター（The Brazil Emigration Reporter）』という新聞を創刊し、調査員の報告を積極的にアメリカ社会に発信した。

また、渡航に不可欠であった蒸気船の手配には、ジェームス・フレッチャーという人物が重要な役割を果たした。彼はニューヨークとリオデジャネイロ間の定期航路網の開設と、1865年に設立されたユナイテッド・ステーツ・アンド・ブラジル・スチームシップ・カンパニー（United States and Brazil Steamship Company）に貢献した。同社の船は年間12回往復し、移民の送り出しと同時に郵便物などの輸送も行っていた。なお、ブラジルへの航路はニューヨーク港を出発し、セント・トーマス島（カリブ海）、ブラジルのパラ州、ペルナンブコ州、バイーア州の順に経由して、リオデジャネイロ港に到着するものであった。こうして、さまざまな準備段階を経て、ブラジル移住への舵は切られたのである。

植民地の形成

次に、南部人の植民地について見ていこう。実際、移民活動の興隆を受けて、ブラジルでは1865年から1867年にかけて、主に7つの植民地が形成された。

まず、1865年にアラバマ州出身のウィリアム・ハッチンソン・ノリスとその息子ロバートらがサンパウロ州のサンタバーバラ・ド・オエステにノリス植民地を築いた。続いて、ルイジアナ州出身のバラード・ダンらがサンパウロ州南部のヴァーレ・ド・リベイラ地方でリジーランド植民地を形成した。同様に、1866年には同地方にテキサス州出身のフランク・マクマランによるジュキア植民地とジェームス・ガストンによるシリリッカ植民地も築かれた。その他、ルイジアナ州出身のホレス・レインと旧南部連合軍のスウェイン大佐によるパラナグアー植民地、アラバマ州出身のチャールズ・ガンターによるジュパラナン植民地、オハイオ州出身のランスフォード・ヘースティングズによるサンタレーン植民地も存在した。

南部人の植民地活動はブラジルの各地で展開されたが、その形成過程は千差万別であった。上記の植民地の中でも特にノリス植民地は繁栄し、同地の南部人は農業活動とプロテスタント伝道を通じて、南部産の綿花やジョージア州産のスイカ、クルミの栽培、灯油ランプや鋤の普及、アメリカナ市の創設、プロテスタント教会やアメリカンスクールの設立など、ブラジル社会に多方面で貢献した。これは通説となっており、研究者の間ではノリス植民地を顕彰する論考がほとんどを占めているため、同地を重要視する傾向が強い。ただし、このような姿勢は他の植民地を不可視化あるいは周縁化する結果を招いており、南北戦争という「負の記憶」を南部人の共通性として認識しつつ、彼らの植民地経験の全体像を明らかにすることが、筆者の研究の課題となっている。

[参考文献]

- Clicea Maria Augusto de Miranda. *Repercussões da Guerra Civil Americana no destino da escravidão no Brasil - 1861-1888. Tese (Doutorado em História Social)* - Faculdade de Filosofia Letras e Ciências Humanas, Universidade de São Paulo, São Paulo, 2017.
- Frank P. Goldman. *Os Pioneiros Americanos no Brasil: Educadores, Sacerdotes, Covos, e Reis*. Tradução pela Olivia Krahenbuhl. São Paulo: Livraria Pioneira Editora, 1972.